

景観のリアリティ

竹田直樹

Reality of the Landscape

Naoki Takeda

【Abstract】

Landscape has come to mean a readily apparent beauty, just as in commercial product design. People look only at the superficial aspect of landscape. However landscape is not superficial, but rather something very political and cultural. Landscape derives its form from civilization. This aspect is overlooked, and the issue rarely goes beyond a readily visible, superficial landscape, so that we have scenic ordinances saying, 'Let's create such and such a scenery.' To talk about scenic development without looking comprehensively at ideology, social systems, or economic matters is to avoid meaningful dialogue on the subject.

1. 景観とは何か

人の様々な営みは景観として視覚化される。道や建物や都市を造り、海を埋立て山を削り、自然を破壊しあるいは保全する。

経済成長は高度な企業社会を形成し、超高層ビル群となって視覚化される。そこで働くサラリーマンは市街地近郊の里山にニュータウンと呼ばれる新しい景観を造った。バブル経済は、積雪地帯や小さな漁村に高層のリゾートマンションを、街角にゴージャスな野外彫刻やイタリアンデザインの建物を林立させる。やがて、株価や地価は暴落し経済不況が訪れる。不良債権が空き地となって視覚化された。景観には社会が反映されている。景観は空間と時間の上に成り立つものだ。人にとって極度に普遍的な存在であると同時に、政治、経済、産業、文化、宗教などを反映する社会的なものでもある。

だれもが景観に関与あるいは参加することができる。ピンクの家に住むのが夢の人、伝統的な建物が好きな人、彼らはそれぞれの欲望を果たすことにより、それぞれ異なる形で景観に関与する。納税者は、防災のために川をコンクリートで固め、交通渋滞解消のために立体交差を造る。車に乗った消費者は、ロードサイドショップ街を成立させ、彼らのさらなるニーズを期待する事業者は、田圃の中に目立つことを競いながら広告看板を設置する。資本主義社会の景観は、個々の欲望の集積体なのだと考えてよい。

そして、あなた(私)が今見ている景観は、あなた(私)にとっての現実なのだ。景観は幻想ではなく、人の身体

をまさに今包み込む空間であり、その人の所属する社会のビジュアルな実像なのである。

2. 景観の価値

景観は如何なる価値を持つのだろうか。絵葉書になる景観は、その価値が一般的に認識された景観の代表だ。旅先から送られてくる絵葉書には、旅情や旅の成功を他者に伝えるための理想の情景が印刷されている。絵葉書の商品価値はここにある。その写真はそれ自体の審美性に関心が向かいロマンティックなファンタジーになっている。これらは現実の景観の中から不必要な部分を排除するか、あるいは現実を再構築し美化する作業の結果としての芸術作品だ。絵葉書になる景観は、現実の実像ではなく架空のファンタジーなのではなからうか。日本三景、〇〇八景などとされる景観はおおよそ全てがこの種の景観で、これらのファンタジーの源泉は中国の伝統的な風景感到強い影響を受けたものである。こう考えれば、絵葉書になる景観は、対象を実像と異なるものにすり替えた虚像であり、この点で抽象的な性質をもっている。

一方、アメリカ合衆国やフランスなどの欧米のいくつかの国は、国土を記録するという観点から、記録としての景観の撮影プロジェクトを長年実施してきた。面白くもなんともないはずのそれらの写真が近年注目されるようになっていく。そこには、厳然たるその場所のその時、すなわち景観の実像が記録されていた。それらはそれを見る人に、その人自身の存在について再発見させる

不思議な力を持っている。そして、この種の景観写真は、新たな景観の価値を提示する。景観におけるリアリティである。

3. 景観におけるリアリティとは何か

それでは、ここでいうリアリティとは一体どのようなものなのだろうか。

景観の中に、何らかの社会性を見出すことができ、この性質がその景観に接する人に社会の中での自らの存在を再発見させる。あるいは、自らの個として独立した存在を認識しつつ、自らを包み込む景観に接する時。そして、個として独立した市民によって構成される市民社会に生活する市民が、結局は市民社会という社会の中でしか個でいられないという事実を認識する時。ここでいうリアリティが生じるのだと思う。

このリアリティの感覚は、滅びゆくもの、遺跡、過去の社会的事実を表現する記念碑、巨大な人工的建造物などに接する時の感覚に似ているように感じる。おそらく、記念碑の美的メカニズムを意味する「モニュメンタリティ」という概念と近縁の関係にあるにちがいない。

もちろん、どのような景観にもリアリティがあるわけではない。リアリティの感じられるリアルな景観とは、やはり特別な景観なのである。

次に、場所を分類しながら、リアルな景観を探してみたい。

4. 景観のリアリティを巡る旅

4-1. 都市のリアリティ

東京に住む友人が、自宅の窓から見える新宿副都心の超高層ビル街の景観を誇らしげに指差した。「すごいだろう。」たしかにその景観は、誇るべき壮観さを備えた威容だと思う。私たちが手にした強大な経済力や技術力をわかりやすく示してくれる。それゆえ、日本中の人々が毎朝、ニュース番組の背景として目にする景観となつたにちがいない。だが、その景観をよく見ると、高さ200mを超える超高層ビルの足元には2階建ての住宅が建ち並んでいる。本来、超高層ビル街の周辺は、都市気象や日照、交通集中などを緩和するために、緑地帯が配置されるべきだ。だが、現実はそのようになっていない。そうしようと思ってもそうはできない都市マネージメント的な事情は容易に理解できるが、おそらくそうならないことがこの景観の迫力を高めているのだと思う。現実の超高層ビル群は緑ではなく、雑然とした既成市街地の背後に立ち上がる。景観のリアリティは、この部分にある。



写真4-1-1. 東京都新宿区西新宿



写真4-1-2. 東京都新宿区西新宿

首都高速の最初の路線は、1964年の東京オリンピックに間に合わせるかたちで開通する。当時、先進国としての体裁を整えたいという思いがあったのだろう。空に弧を描きながら高層ビルの間を縫うように走る都市高速のフォルムは、SFマンガに描かれた未来都市の具現化であり経済発展の証であった。だが、当初より川や一般道に蓋をするかのように建設され、挙げ句の果てに浮世絵で世界に知られた日本の道路の原点「日本橋」の上部を通過するなど、景観的視点から最悪の都市施設として批判されることも多く、今ではこちらの認識が主流となっている。たしかに、日本人のアイデンティティに関わる日本橋の景観を木端微塵に破壊してしまったことは驚きだ。旧ユーゴスラビア紛争では相手方の民族としてのアイデンティティを攻撃するために、歴史的な橋梁が砲撃の対象になったことがある。日本人は、そんな景観をちょっと便利な都市高速と引替えに自ら放棄したわけだ。一方、近年になって首都高速の魅力を積極的に表現するムーブメントが見られるようになってきた。若手の映画監督や映像作家の首都高速の描写の中にそうした魅力がよく表れる。彼らは、都市の文脈や歴史をリセットするかのように走る首都高速の機能的フォルムの中に新

しい精神原理と秩序を発見し、そこにリアリティを見ているにちがいない。



写真 4 - 1 - 3 . 東京都港区南麻布



写真 4 - 1 - 4 . 東京都港区西麻布

4 - 2 . 郊外のリアリティ

緩やかな丘陵地に果てしなく住宅地が広がっている。こんな郊外住宅地の景観を身近に感じる人は多いと思う。国民全体の中で郊外で育った人がすでに多数派になりつつあるからだ。だが、郊外の歴史は長いものではない。その多くは戦後の高度経済成長にともなう都市の膨張により生まれたのである。かつて、地方都市や農村や漁村に暮らしていた人々は職を求めて大都市へ移住した。当初、彼らは、それぞれの出身地の伝統的な文化を色濃く残した思考や生活をしてきたに違いない。しかし、郊外に定着した彼らの二世や三世は、そうしたものから少しずつ遠ざかり、ついには郊外に根ざす新たな都市文化を形成しつつある。文学や映画、写真などの分野で、それは特に顕著に見える。おそらくこの文化が次の日本文化の本流になるにちがいない。そう思うと郊外住宅地の景観が次の日本の原風景に思えてくる。そして、何の変哲もない住宅地の景観がリアリティをおびる。



写真 4 - 2 - 1 . 大阪府南河内郡河内南町東山



写真 4 - 2 - 2 . 千葉県松戸市常盤平



写真 4 - 2 - 3 . 大阪府和泉市いぶき野



写真 4 - 2 - 4 . 兵庫県加古川市別府町西脇

農地や空き地、郊外住宅、マンション、農家、各種のロードサイドショップとその残骸、ホテル、結婚式場、資材置場、ゴルフ練習場、廃棄物、工場、広告看板……
 ……大都市の縁辺部は脈略のない世界だ。けっして無法地帯というわけではないが、開発や土地利用に関して、計画やビジョンなどというものは存在しない。自動車に乗った道路の利用者は、その脈略のない連続を客観的に認識して通り過ぎていく。おそらく多くの人々は、その過程で何も感じないだろう。大都市の縁辺部はいつでもよい場所であり、そこにはいつでもよい景観が広がっている。しかし、このように捉えられる景観こそ、実は最もリアルなものなのではなからうか。つまり、ビジョンも計画も持たず、期待もされない景観とは、自然の景観とは異なり社会的な性質を帯びているにもかかわらず、社会的な恣意性を持たない景観であり、そのような景観の中にこそ、その社会の実像が色濃く表れている。



写真 4 - 2 - 7 . 兵庫県加古郡番磨町大中

大都市圏の宅地開発は丘陵地形をものもしない。平坦地と同様の高密度な開発が傾斜地にまで及び、丘陵全体が谷から頂上まで宅地化してしまう。長崎や尾道などの平坦地の少ない港町では、古くから斜面が居住の場となってきた。こうした都市にはしっとりとした「坂の町」の風情がある。それは、港と地形や歴史に基づく必然性を背景にしているからだ。だが、大都市圏の坂の町は、こうした観点からの斜面開発の必然性が希薄である。斜面を宅地化する場合、平坦地よりも造成費用がかかるが、地価との関係でそれが許容できる場合に開発される。こうした経済原理を背景とする坂の町は、偏狭な価値観に支配されやすいのではなからうか。「千と千尋」で生きる力を失いかけた世界として描かれた景観だ。近年こんな町で度々起こる恐ろしい少年事件を思い起こすと景観は強いリアリティに包まれる。



写真 4 - 2 - 5 . 千葉県市原市八幡浦



写真 4 - 2 - 6 . 大分県大分市城東町



写真 4 - 2 - 8 . 兵庫県神戸市垂水区名谷



写真 4 - 2 - 9 . 神奈川県横浜市保土ヶ谷区初音ヶ丘



写真 4 - 2 - 10 . 神奈川県横浜市保土ヶ谷区仏向町

4-3. 農村のリアリティ

長野県の安曇野地域は、北アルプスを間近に望む風光明媚な田園地帯である。南部に人口約 20 万人の松本市があるが、その他は谷に沿って人口数千から 2, 3 万人の市町村が並ぶ。そんな農村部の真中に大手資本のスーパーマーケットがやってきた。今日の農村はどこでも車社会である。おそらくこの店舗は、安曇野地域全体から集客するのだろう。住民にとっては都会的で魅力的な商業施設かもしれないが、地元の商店街は太刀打ちできず衰退し、中心市街地の空洞化につながっていく。刈り取りの終わった田圃の中の巨大な看板を掲げた窓のない倉庫のような建物は、その無駄のない合理性によってリアルな光景を造りだす。



写真 4 - 3 - 1 . 長野県安曇野市大妻

山間に見られる棚田は、機械化が進まずこのところ耕作放棄地が急増している。農業経済的視点からは価値のない存在かもしれないが、長年にわたって人力によって営々と築かれてきた棚田の姿は、地域の文化資源としての価値をもち、また景観的にも重要な存在である。もちろん水資源の保全や土砂崩れの防止など物理的、防災的機能もある。近年、棚田を保全しようとする機運が盛り上がり、農林水産省は 1998 年よりウルグアイ・ラウンド農業対策費を活用した基金の積み立てを開始した。自治体単位では、補助金の支給や都会の人に棚田を貸し出す「オーナー制度」を始めた所もある。ただし、いろいろな手段や工夫を講じても、棚田の保全は難しいのが現状だ。かつての農家は、その生存をかけて少しでも多くの食糧を得るために必死の思いで棚田を開墾したにちがいない。明治以降の急激な人口増加にともない、それも限界に達して、日本は朝鮮半島や満州などの近隣諸国や南米に農地を求めたのである。棚田が放棄されるということは、日本がすでに侵略戦争や移民を行わなくてよいことを意味している。同時に、この事実は棚田の保全が如何に難しいかを意味する。棚田の景観を造ったのは農家の次男や三男だったのかもしれないと思うと、その一段一段がリアルに見える。



写真 4 - 3 - 2 . 三重県熊野市紀和町丸山

山々に囲まれた水田の中に茅葺き屋根の農家が点在し、庭には大きなカキノキあるいはケヤキやクスが生えていて、両岸に雑草が茂る小川の端で水車が回る。こんなノスタルジックな農村景観は、都市に住む人々が勝手に描く農村の夢なのだと思う。それは、郊外の夢とは絶対に異なるはずなのだが、実際にはそうでもないようだ。現実の農村には、郊外と全く同じハウスメーカーの家が建ち並んでいる。



写真 4 - 3 - 3 . 兵庫県南あわじ市神代



写真 4 - 3 - 4 . 長野県伊那市中坪

4 - 4 . リゾートのリアリティ

バブル経済は、全国各地のリゾート地にマンション群を林立させた。当時はリゾート法という法律まで整備され、リゾートという言葉自体がはやっていた。リゾートマンションや会員制ホテルも利用のためというより値上り益を期待する資産として建設、販売されていたのではなからうか。また、肝心の利用率が低いため、地元経済に与える影響はほとんどないようだ。価格も値下がりしており、購入者にとっても思惑とは異なる結果となったケースが多いのではなからうか。この時期のこの種の建物は真面目な雰囲気のものが多い。何より規模の大きさや立地の唐突さがリアルである。

海が見える別荘地。土地が分譲され各土地所有者により思い思いの建物が建ち始めた。ログハウスやパステル



写真 4 - 4 - 1 . 三重県鳥羽市白根崎



写真 4 - 4 - 2 . 新潟県南魚沼郡湯沢町布場

カラーの建物が目立つ。テーマパークのデザインを思わせる建物は、それぞれの別荘に対する夢を実現した結果なのだと思う。このようなタイプのデザインが、なぜ好まれるのか。そして、それらが高い建べい率となりぎっしりと建ち並ぶ情景には疑問を感じざるを得ない。いうまでもなく、その背景には個々の所有者の予算との関係がある。この別荘地は自らの理想の実現を図ったものにはちがいないが、その理想の中に消費への欲望が感じられる。建物のデザインは流行を強く意識したものだし、



写真 4 - 4 - 3 . 兵庫県淡路市尾崎

既成市街地の住宅地並みに建て込んだ街並みは、予算との関係で大きな妥協が行われた結果に見えるからだ。別荘も自動車や家電と同じ商品の一つなのだとすれば、それを消費するためには、予算にあわせてどこかで妥協しなければならないのである。その妥協の仕方が、景観の中にリアルに表出する。

4-5. 工業地帯のリアリティ

工業地帯は、経済の原動力としての役割を果たす場所であり、現代社会は工業地帯なしには成立しない。ではあるが、居住環境の保全という観点から、関係者以外には目に触れにくい場所に立地して、現代社会にとって不可欠な存在なのに忘れられがちな場所になっている。そこは、工業生産という単純で明確な一つの目的を持つ場所であり、それに不必要な余分な要素はなにもない。幾何学的な形態に支配され、広告看板など商業的要素の断片さえない。建物のデザインには、過去の如何なる伝統文化の影響を見出すことができない。工業地帯の景観の特徴は、殺伐としたものであるかもしれないが強い統一感をもつことである。もちろんこの統一感とは、意識的に演出されたものではない。工業生産という単純で明確

な一つの目的が、外面的なデザインに表れたリアルな結果なのだ。

重厚長大産業が生み出すコンビナートの景観は、今日では公害のイメージの影響もあり、一般的に好まれる景観とは言いがたい。だが、公害が社会問題化する以前の少なくとも 1960 年代前半までは、戦後日本の産業復興を具体的に示す、めでたい景観として、多くの人々に好まれた。

当時は、富士山を背景として煙を立ち上げるコンビナートが絵葉書になったりしていたのである。豊かな生活を保障してくれる景観としてとらえられていたにちがいない。しかし、その後の公害発生により、コンビナートの景観は、水俣の少女の痛々しい写真と重なりあうことになる。公害問題が概ね解決され、重厚長大産業自体が過去のものとなりつつある今日、再びコンビナートの景観を見てみると、その非日常的なメカニカルな光景の中には、すでにノスタルジックな雰囲気が感じられる。滅びゆくもの特有のリアリティが漂っている。



写真 4-5-1. 茨城県神栖市神之池



写真 4-5-2. 神奈川県川崎市川崎区夜光



写真 4-5-3. 神奈川県川崎市川崎区夜光



写真 4-5-4. 大分県大分市原川

4-6. 自然のリアリティ

日本には多数の火山があるため火口湖も多い。日本の自然景観を考えると、火口湖の神秘的な景観は、変化に富んだ多様な海岸景観、多島海景観、コニーデ火山の景観などととも重要な要素の一つである。十和田湖の魅力は、奥深い山間の立地と複雑な湖岸地形、そして何より規模の大きさである。大規模なため火口のイメージは感じにくい、急峻な山岳地帯に突如展開する広大な静水面は見る人を魅了する。十和田湖は全体が天然記念物に指定されている。天然記念物とは、1919年に制定された史蹟名勝天然記念物保存法に基づくものである。この法律は日本の最も初期の自然保護に関わる制度の一つであり、ヨーロッパとりわけドイツの郷土保護運動をルーツとし、「日本が誇る天然記念物を残そう」という発想の中で制定された。その背後には日露戦争後に高まったナショナリズムがあり、皇室関連の史蹟などと密接な関係をもっていた。この流れの延長線上に国家主義やファシズムがある。ドイツや日本の自然保護思想は第二次大戦を勃発させた思想と無縁ではないのである。こうした視点から見れば十和田湖の景観の中にも政治的な性質が内在されることになる。絵葉書になる景観の中にも見方を変えればリアリティが存在する。

この数十年の間に、瀬戸内海を渡る数多くの橋梁が建設された。当初は、橋梁が日本を代表する景観の一つである瀬戸内海の景観を台無しにするのではないかと憂慮され、橋梁のデザインや色彩に対する検討が重要視されてきた。結果的に、小さな島が橋脚の足場に見えるなどネガティブな影響も見られたが、全体的には橋梁という新たな景観要素の出現が、ポジティブな影響を自然景観にもたらしたのではないかと思う。渦潮で有名な鳴門海峡を渡る鳴門大橋も複雑な海岸線が形成する第一級の自然景観地において、少なくとも遠景から見た場合、効果的な添景となったようだ。また、渦潮と鳴門大橋をセットで鑑賞する眺望点や鳴門大橋に沈む夕日を見る



写真 4-6-1. 青森県十和田市十和田湖

ための眺望点も整備され、さらには橋梁自体が渦潮鑑賞の眺望施設として利用されるなど、景観の利用に貢献している面もある。しかし、なぜ、瀬戸内海の橋梁群が景観にポジティブな影響を与えることができたのだろうか。橋梁のデザインが悪くなかったことは言うまでもない。だが、この問題以前に、自然景観と人工構造物の関係にかかわる問題がある。東洋の伝統的な絵画において、自然景観と人工構造物の組み合わせが表現形式として確立されていることからわかるように、両者には相互に作用しあってポジティブな影響を生み出す性質がある。おそらくそれは、人と自然の関係に関わる問題なのではなからうか。自然そのものの美しさとも人工物の中に人工的に作り出される美しさとも異なる、人と自然の関係の中に生じる美しさが存在するのである。その美しさに関する概念が、風致という言葉なのだと思う。風致という価値観は、物質文明や消費社会の中で忘れ去られようとしているが、景観について考えるとき重要な概念だ。そこには、現代社会が失った社会的な普遍性をともなう美が内在されている。そして、景観におけるリアリティもまた、その景観に接する人と、その景観の関係の中に生じる感覚であるという点で、この風致という概念と類似するメカニズムをもっている。



写真 4-6-2. 兵庫県南あわじ市田尻

5. 物質文明の黄昏と景観のリアリティ

明治維新により宗教を、終戦により全体主義的なイデオロギーを失った日本人は、資本主義+民主主義+自由主義の中で「市民」となって「市民社会」を形成するはずであったが、その前に「会社人間」となって物質的な消費社会あるいは企業社会にはまってしまった。人々は宗教や軍国主義に帰依したように会社に帰依して精神的な安らぎを得て、さらに冷蔵庫、洗濯機、テレビ、ビデオ、エアコン、自動車、パソコンなどを次々に手にし物質的な豊かさに酔いしれた。この物質文明の特徴は、全ての物やサービスの価値が商品としての価格によっ

て一元的に規定されるところにある。人々は、価格の高いものを低いものより価値があるものだと考えるようになった。今、はやりの「お宝鑑定団」なるテレビ番組は、秘蔵のコレクションの鑑定結果に一喜一憂する出演者の表情を通して、この事実を明快に証明してくれる。さらに、ここで使用される金銭的な価値尺度は、ブランドという派生的な価値を生み出すことになる。ブランドとはもともと消費社会の中で、特定の商品の価格を高く維持するために考えられた商品に対する階級のようなものであったが、これが民主主義下の平等で自由な競争の中で進化し、ブランド大学を卒業すること、ブランド企業に勤めることなどとして人間自体に商品的な価値をもたらす。これは多くの母親が子供に対して期待する価値となっただけではなく、交通事故で死んだ時、お見合いサークルに入会する時などに現実に査定されるものとなった。この予備査定に相当するのが偏差値である。3万円の商品より5万円の商品の方が価値が高いと考えられるように、学校教育の中で偏差値51の生徒より偏差値62の生徒の価値が高いことになってしまった。

これは行き過ぎだということで、なぜか偏差値自体が攻撃の対象となり使用が禁止されてしまったが、それでもしばらくの間は、経済成長すなわち物質的拡大の中、こんな価値基準を大半の人々が信じながら社会は明るく安定していた。

そして、物質文明はそれにふさわしい景観を造った。すなわち、超高層ビル街、空を覆う都市高速、整然としたニュータウン、林立するリゾートマンション群、田園の中のスーパーマーケットなどである。物質文明の中で、こうした景観は、大気のような存在として、人々に何も感じさせはしなかった。

だが、今日、カルト教団や少年犯罪などの社会問題が無視できないものとなり、経済的な停滞とあいまって社会全体が深い閉塞感に包まれている。バブル崩壊にともなう金融不安が、近年の不況の直接的原因であることはたしかだが、それ以前に欲しい商品が少なくなり、物の入手が人生の目標にならなくなる状況があるのだという経済学者もいる。この状態は、物質的な拡大を持続しなければ破綻してしまう資本主義経済の根幹にかかわる問題でもある。人々の物への欲望が減退するとき、物質文明はシステム的にも精神的にも不安定化する。また、高級官僚の腐敗や相次ぐ自殺、ブランド企業の倒産やリストラなどにより、これまで信じられてきた価値に疑問が生じ始めたことも重要だ。江戸時代の身分制度のように、ブランドは現代社会の統制原理の一つに成長していたからだ。価値があると思われていたものが価値を失う

時、社会は不安に包まれる。幕末や終戦直後の社会現象がよい事例になろう。今日の物質文明は、制度的に限界に近づきつつあるのではなからうか。宗教がないだけに諸外国より強力であった日本型物質文明もいよいよ黄昏が近づいてきたようだ。

今日、私たちは文明の転換期にいる。若者たちはすでに物質ではなくコミュニケーションに価値を見い出している。彼らは携帯電話を媒介としたネットワークの中に自らと外部の関係を構築し、小さな安息を得ているのかもしれない。

物質文明や企業社会の終焉は、人々を個として独立した市民とし、本質的な市民社会の形成を促している。本当の市民社会に突き出された人々は、個として独立しているということが、茫漠とした砂漠の中に一人佇むことと同じなのだということを知った。そして、これまで大気のような存在であった景観は、新たな異なる性質を持ちはじめている。不安に包まれた人々は、無意識のうちに、景観の中に自らの存在と社会の関係を再確認せざるを得なくなった。砂漠の中に一人佇む人が、景観の中に自らを再発見するように。

不安に包まれた社会の中で、景観はリアルなものに変質しつつあるのだと思う。景観におけるリアリティとは、景観に接する人と社会の関係の中に所在する。今まさに景観が再発見されつつあるのではなからうか。